

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

1940年～1945年のペルー日本人移民：
排日・追放・抑留の時代

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Oohama, Naoko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1473

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



【博士論文審査の要旨】

本論文は、1940年から1945年のペルーの日本人移民が直面した苦難・受難をめぐる当事者の「語り」に耳を傾けることで、「排日暴動-日系人強制追放-米国抑留」という定説的構図の再点検を試みようとする意欲的な研究である。

第1章では、ペルー北部チクラヨでの実情の聞き書きによる再構成に基づき、日本人と地域住民は非対立的関係にあったとして、強制連行に先行して排日宣伝が展開された形跡がないことを指摘する。第2章では、リマ市略奪事件の背景にある煽動的な反日デマが大都市リマの特定の住民に受け入れられた社会的背景について考察する。第3章では、ペルーでの拘束、米国移送、収容所生活、戦後の日本帰国などをめぐる当事者や関係者の語りを通じて、一連の受難体験のとらえ方が多様であったことを指摘している。第4章では排日という要素が見られなかったポリビア暫定政権による一握りの商社関係者の追放は、米国からの承認と引き換えに行われた可能性を示唆する。

本論文では、4半世紀にわたる関係者への寄り添いで初めて得ることのできた証言が基礎となっている。また、強制連行体験者や関係者の語りだけでなく、日本人の周囲にいたペルーの人々の語りも加えることで、従来の日系移民史という狭い枠組みから脱出することに成功している。以上の理由で、本審査委員会は、本論文は学位請求論文として十分な資格をもつものと判断する。

【論文審査結果】

本論文の最大の貢献は、1940年から1945年のペルーの日本人移民が直面した「苦難・受難」を巡る当事者の「語り」に耳を傾けることで、「排日暴動-日系人拘束・追放-米国抑留」というオフィシャル・ストーリーの構図の見直しを試みたことである。その構図の見直しの武器となっているのは、1970年代半ばから現在に至るまでの長期間にわたり採集した、同時代を体験した多様な人々の呟きや嘯きにともいえる語りである。

第1章では、まず、第2次世界大戦開始後、政府による日本人強制連行が見られたカナダ、メキシコ、ペルー、ポリビア、ブラジルなどの経緯が整理される。次いで、中南米で最大の強制連行が見られたペルーの事例が排日運動の延長でとらえきれないことを指摘する。ペルー北部チクラヨ在住のペルー人、日系ペルー人からの聞き取りを通じて、首都リマなどで支配的だったとされる「反日的感情」がペルー北部の社会で共有されてはいなかったことを明らかにしている。

第2章では、1940年5月に起きた首都リマ一帯で起きた「排日暴動」を強制連行の前段階と見なす従来の見解の見直しが試みられている。略奪行為の目撃者は、日本軍侵略の噂や古屋事件における日本領事館の介入に対する反感を口にしながら、略奪事件の主犯である「暴徒」と見なされ人々の実態をよく観察していた。彼らは急激に拡大した首都リマに流入した対象となった

第3章では、2002年11月、米国クリスタルシティ収容所元抑留者の集いに参加したペルー組からの聞き取り、証言テープや彼らが残した日記、回顧録などに基づいて、ペルーを離れた人々が辿った苦難の跡を検証しようとしている。とりわけ、家族組が収容されたクリスタルシティ収容所における日常生活に関しては、補償問題裁判との関係から「肯定的側面」が語られてこなかったことを指摘する。また、単身者が収容されたサンタフェ収容所では、同じ日本人という「同

胞」と出会いながらも、ペルー組は、大陸組やハワイ組と積極的な交流関係を築くことがなかったことも明らかにしている。

第4章では、30名弱の強制追放者があったボリビアの事例が、1,800名もの強制追放者があったペルーと同じように、政府や社会における排日の動きの論理で説明できないことを指摘する。強制退去の大多数が滞在年数の短い商社勤務の青年層であったことを指摘し、政変によって成立した暫定政権が、米国や中南米諸国からの承認を得る目的で行われたことを指摘する。

惜しむらくは、当初の構想にあった「第5章：二世たちと帰化神父」が本論文に組み込まれなかったことである。

以上概観したように、本論は、長期化にわたる当事者からの聞き取りなどに基づく多様な「語り」を駆使し、1940-1945年のペルー日系人社会に関する公的な言説で語られなかった側面を明らかにしている。また、日本人移民史、強制連行の人権侵害という枠組みで論じられた日本人強制連行を、首都リマの社会変化、地方都市における住民との社会関係、ペルー社会における噂の機能など、より広いコンテクストの中で論じようとしたことも意欲的である。その意味で、本論文の学問的貢献は大きなものである評価できる。

[最終試験結果]

最終試験は、2013年2月7日午後2時30分から第1会議室で実施され、丹生谷貴志(主査)、田中敏彦、芝田幸一郎、および小林致広(京都大学文学研究科)、富山一郎(同志社大学グローバル・スタディーズ研究科)が審査を担当した。冒頭に申請者が約30分の博士論文の概要説明を行った後、約2時間に及ぶ質疑応答が行われた。

審査委員からは、公的語りを含めた「語り」全体の位置づけ、排日暴動の解釈、当時のペルー日系人社会内部の多様性などに多岐にわたる質問があり、充実した議論が交わされた。

公開審査終了後、全員がそれぞれの見解と評価を述べ合うかたちで、論文の評価を行った。その結果、当該論文が、長期間にわたる地道な聞き取り調査の集積を踏まえた研究成果であり、既往の研究に見られなかった斬新な論点を提起するものであることで合意が得られた。よって最終試験の結果を「合格」とすることが決定された。